

# 佳作

## 『「方言コスプレ」の時代』 田中ゆかり著

### 文学研究科 博士前期課程 1年 三浦直人

数年前、映画「清須会議」(三谷幸喜監督)を観て、「おや?」と思った。大泉洋扮する羽柴秀吉が、名古屋弁を話していたのである。考えてみれば確かに、農村出身の秀吉には、地元・尾張の言葉が相応しい。しかし、大河ドラマの秀吉像に慣れてしまった私には、拭いがたい違和感があったのも事実である。そもそも、歴史ドラマで、方言イメージの合う人物と合わない人物がいるのはなぜだろう。本書は、そんなモヤモヤを解消してくれる。

「方言コスプレ」とは、方言の非ネイティブが、くだけた会話やメールのやり取りに、方言を用いることである。例えば、東京で生まれ育った友人から、「明日どないしょ?小テストだべ?」といったメールが届くケースがある。一つの文章に、関西弁と東北弁が混じっていたりもする。こうした現象は、方言を着脱可能なアクセサリのように見えず、近年の傾向を反映している。

「方言コスプレ」流行の前提には、<関西弁=面白い><九州方言=男らしい>といった「方言ステレオタイプ」の定着がある。ここで方言は、「役割語」(「わしは博士じゃ」など、人物像と結び付いた紋切り型の言葉遣い)の一種と見なされる。著者は、大河ドラマなどのテレビ番組から、方言イメージの変遷を辿った。西郷隆盛の陰に隠れ、「方言キャラ」になり損ねた大久保利通。高度成長期まで標準語を話していた坂本龍馬——。本書は、誰かに話したくなる小ネタの宝庫でもある。

但し著者は、断片的な方言トリビアを提示するに留まらない。むしろ、方言から現代日本を描き出すという巨視的な分析が光る。中村桃子『翻訳がつくる日本語』、金水敏『コレモ日本語アルカ』など、役割語を扱った近年の研究は、どれも文句無しに面白い。ところがこれらはいずれも、役割語の裏に潜む見えない差別構造を暴露したところで終わっている。他方、著者が見つめるのはもう一歩先である。

勿論彼女も、「方言コスプレ」が「東京勝手な現象」である可能性を指摘している。「方言コスプレ」は、かつての方言撲滅運動と表裏の関係にあるとも言える。しかし、多くの役割語研究が、弱い者への眼差しに終始したのに対し、著者は、方言話者自身の方言意識を分析することで、可哀想な弱者としての方言話者像をひっくり返して見せた。

『「方言コスプレ」』は、一見、都会勝手、東京勝手な現象にみえるが、[中略]「方言」のありかたの“未来予想図”のひとつになるだろう」(p254)

ところで冒頭の大泉洋は、記者会見において、名古屋弁を「可愛い」と評した。ここには、標準語話者の「上から目線」という差別構造が反映されているようにも見える(大泉の出身地・北海道は、東京に次ぐ標準語地域である)。しかし同インタビューには、次のような発言もある。即ち、北海道には分かりやすい訛りがないため、名古屋弁に憧れていたのだと。蔑視から憧れへ。ここにも、「方言コスプレ」時代の言語観が表れている。